

30amG-145

ドライ系薬学領域の学会誌からみるディシプリンの動向と課題

○寺岡 章雄¹, 津谷 喜一郎¹(¹東大院薬)

〔目的〕 学問発展の構造では、新しい学問領域(ディシプリン)を切り開くパラダイムが学問のスタイルを定め、知的集団である学会の活動を正当付け、規準化された学問のその後の発展コースを規定する(中山茂, 1974)。薬学領域で実験科学でないドライ系の学会誌の内容を分析し、これらのディシプリンの動向と課題について明らかにしたい。

〔方法〕 薬学図書館(発刊年: 1956)、薬史学雑誌(1966)、社会薬学(1982)、薬剤疫学(1996)、医薬品情報学(1999)、日本ファーマシューティカルコミュニケーション学会会誌(2003)、薬局薬学(2009)、アプライド・セラピューティクス(2009)、レギュラトリーサイエンス学会誌(2010)の9誌を対象とした。

〔結果および考察〕 日本の薬学は実験科学を基盤として独自の発展をしてきた。ドライ系の薬学研究は、分業元年とされる1974年頃から医薬分業の進展による社会的ニーズに応え活発化する。それまでも新たな総合科学としての薬学の発展を希求する論文が、ドライ系の最初の学会として創立(1954)された日本薬史学会の薬史学雑誌などに掲載されてきた。上記に挙げた学会誌9誌は、その名称と発刊年そのものが、ドライ系薬学のディシプリンの動向を示している。なお、ファーマシューティカルコミュニケーションは、患者主体の医療の向上のためには薬剤師のコミュニケーション能力の向上が不可欠とし、その体系づけの研究を行っている。アプライド・セラピューティクスは、サプリメントも含めた薬物治療が合理的なエビデンスに基づき行われることをめざしている。レギュラトリーサイエンスは、行政科学、評価科学とも訳され、科学技術の成果を社会との調和の上で最も望ましい形に調整する。これら学会誌の内容から課題などについて論ずる。